

【翻訳】

フレデリック・ダグラス著

## 『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第三章～第四章\*

堀 智 弘

### 第三章 作者の両親

謎に包まれた作者の父親～作者の母親～母の容姿～奴隷制による母と子の自然な愛情への妨害～作者の母親の境遇～母による夜間の息子訪問～ある印象的な出来事～母の死～母の埋葬場所

もし読者が、わたしが成長する時間を許してくれて、わたしの経験が増す機会を与えてくれるくらい親切なのであれば、わたしが意志に反して、この上なく突然に、しかし想定外というわけではなく置き去られたエドワード・ロイド大佐の農園とご主人さまの家で、わたしが見て、感じて、聞いたとおりの奴隷生活を追ってお伝えしよう。さしあたり、わたしの愛しき母<sup>1</sup>についても

少し述べるといふ約束を果たすことにしよう。

父親については、見通すことができたためしない謎に包まれているので、何も言わない。奴隷制は家族を用無しにしているのと同様に、父親を用無しにしている。奴隷制には父親も家族も無用であり、奴隷法は農園の社会的秩序のなかに父や家族の存在を認めていない。父親や家族が確かに存在するときには、それらは奴隷制のなかから生まれ出たものではなく、その体制に対立する。ここでは文明の秩序が転倒されている。子供の名前がその父親の名前であることは期待されておらず、父の身分は子供の身分に必ずしも影響しない。彼はティルマン氏の奴隷かもしれないが、その子供が生まれれば、子供はクロス氏の奴隷であるかもしれない。

(19)

\* 本稿は JSPS 科研費 JP18K00404 による研究成果の一部である。

1 ダグラスの母ハリエット・ベイリー（一七九二～一八二五年？）は、ベッツィーとアイザック・ベイリーの十二人の子供の二番目である。

れない。彼は自由民であるかもしれないが、その子供は奴隷であるかもしれない。彼は白人で、そのアングロサクソンの血の純潔さを誇っているかもしれないが、彼の子供は黒々とした奴隷たちと同等の身分であるかもしれない。実際、彼は同じ子供の主人であり父親であるかもしれない、そしてしばしば主人であり父親なのである。もし子供の母親の血管に三十二分の一のアフリカの血が流れていれば、彼は夫になることなく父になることができ、非難を受けることなく子供を売り払うことができる。わたしの父親は白人、もしくはほぼ白人であった。時として、わたしの主人がわたしの父親であると囁かれていた。

しかし話を戻そう、あるいはむしろ話を始めよう。母親についてのわたしの知識はとても乏しいが、とても明瞭である。彼女の容姿と身のこなしは、拭い去ることができないほど、わたしの記憶に刻まれている。彼女は背が高く、見事なほどスタイルが良く、深い褐色のつやつやした顔色をしていて、整った顔立ちの持ち主であり、その振る舞いは他の奴隷たちのなかでは際立って落ち着いていた。『プリチャードの人類の自然史』のなかに——一五七ページに——人物の頭部が描かれていて、その顔立ちが母にあまりにそっくりなので、わたしは、他の人たちが愛しき故人の絵を

2 テイルマン氏 (Mr. Tilman) は次章でロイド大佐の近隣の奴隷農園主の一人とされている。グロス氏 (Mr. Gross) は恐らく実在する人物ではなく、(恐らく野卑さを連想させる意図でこの名前を与えられた) 架空の人物だと考えられる。

3 ダグラスは第三自伝『フレデリック・ダグラスの生涯と時代』(一八八一年、増補版一八九二年)では対照的に、「父親については何も知らない」とのみ述べている。

眺めるときに経験するであろう感情のようなものをもって、しばしばその画像に立ち返っている。

だが、わたしが母にとっても深い愛着をもっていたとは言うことができない。子供時代のわたしたちの関係が異なったものであれば、当然抱くであつたであろうほどに深い愛着では確かになかった。わたしが幼児に過ぎなかつた頃に、それでもちろん、母親を他の人から見分けられる前に、通常の慣習に従って、わたしたちは引き離されたのである。

〈全能の神〉がその叡智と慈悲によって、寄る辺なき幼児へ、彼の運命の災難と変転に備えて与え給う愛情の萌芽は、わたしの幼いながらの理解力がはじめて努力して把握し認識しようとした優しき手と親切な態度の持ち主である、あの情愛深い祖母に向けられて発育した。したがって、恵み深い〈父なる神〉が、母の心の痛みと傷の部分的な埋め合わせとして母に与えてくれる、母子関係に付きものの無上の優しさに満ちた愛情は、わたしの場合には、奴隷制の嫉妬深く欲深く欺きに満ちた手によって、その真の自然な対象から逸らされてしまった。母奴隷は、主人の帳簿に別々の名前を追加する際には、母親としての労苦の激しさに耐えるのに必要な期間だけ農作業から免除されるが、その期間は、彼女の子供が分別をもつて微笑むことでもたらされる喜ばしい報酬を受け取れるほど長くはない。わたしは、奴隷制が幼児期のわたしの愛情をこのように妨害したこと、そして奴隷制によってそうした愛情が当然行くべき道筋から逸らされたことを考えるにつけ、ふさわしい表現を見出すことのできない感情に満たされずにはいられない。

どんな時であろうと、母が祖母のところにいるのを見たという記憶はない。母のことで覚えているのは、ロイド大佐の農園にわたしを訪ねてきてくれて、ご主人さまの台所にいた時のことだけである。母がわたしを訪問してくれたのは回数としてはごくわずかで、滞在時間は短く、ほとんどの場合、夜間であった。わたしに会うために母が被った骨折りと苦労は、彼女の心が真の母親のものであること、奴隷制が真の母親の心を母親らしからぬ無関心で麻痺させることは難しいということをわたしに教えてくれる。

母は、ご主人さまの住居から十二マイルほどのところに住んでいるスチュアート氏なる人物に貸し出されており、農作業を任されていたので、日中はこちらにやってくるだけの時間の余裕はめつたになかった。夜間であることと距離の両方が母の訪問の障害となっていた。馬車に同乗させてもらう機会が偶然舞い込んでこなければ、母は歩かざるをえなかった。時にそういう幸運に恵まれることもあったが、行き帰りのどちらかはいつも歩かなくてはならなかった。黒人の母奴隷がその距離を歩いていける時に、彼女が二十四マイル乗っていくための馬やラバを使うことを許すというのは、奴隷制が認めている以上の贅沢であった。しかも、母奴隷が自分の子供たちに会いたいという関心をみせるのは愚かしい気まぐれだと見なされており、ある点から言えば、それはそれとおりである——母奴隷は子供たちに何もしてやることができなないのだ。彼女は自分の子供たちに対して何の権限もなく、主人が子供の運命に関するすべての事柄において母親以上に大きな存在となっている。だとすれば、なぜ母親が気にしようか？彼女には何の責任もないのだ。そのように考えられ、そのように行われ

てきたのである。この近隣で常に情熱と暴力をもって執行されている農園の鉄則によれば、朝、夜明け前に野良仕事に出てこなければ、その欠勤した奴隷に特別な許可が与えられている場合以外は、笞打ちが罰である。「子供に会いに行っていました」は奴隷監督の耳や心には言い訳とはならないのである。

わたしがロイド大佐のところに行った頃の母親の訪問のひとつを、母親の愛と母親の心配りの真摯さを明るく照らし出してくれる出来事として、とてもはつきりと覚えている。

その日、わたしは、ご主人さまの屋敷の料理人である「ケイテイおばさん」(敬意を表して「おばさん」と呼ばれる)の機嫌を損ねてしまった。今ではこの時にどんなことをしてしまったのかを覚えていない。というのも、その方面ではわたしの悪さは数知れなかったが、それが重罪となるかはケイテイおばさんの気分次第だったからである。しかし彼女はその日、私を罰するのにお気に入りのやり方、すなわち一日中——つまり朝食後からということだが——食べ物なしで過ごさせるというやり方を採用した。昼食後の最初の二時間は、わたしは自分の気力を保つのに成功した。しかし、午後のあいだ敵に対して見事な抵抗を見せ、勇敢に戦ったとはいえ、日没時に恒例のトウモロコシパン一切れの補給がなければ、最後は屈服させられるにちがいないことをわたしは知っていた。日没となってもパンはなく、そのかわりにもらったのは、「お前が死ぬまで、飢えさせてやるよ」という脅しで、おばさんはその恐ろしい中身にうまいこと釣り合ったしかめ面でそう言うのだった。おばさんはナイフを操って他の子供たちにパンの厚切りを切つてあげると、パンの塊をしまったが、その間じゅう、

わたしに対する残酷なたくらみをつぶやいていた。わたしは、この失望——というの彼女の機嫌もそのうち直ると期待していたので——に抗って自分の威厳を保つためにもうひと頑張りしたが、まわりの子供たち誰もが楽しく満足した顔つきをしていることに気づいて、もはやこらえられなくなってしまった。家の裏に行つて、一人前の人物のように泣いたのだ！これに疲れると、台所に戻つて、炬火のそばに腰を下ろし、自分のつらい宿命を考えを巡らした。あまりに空腹すぎて眠ることはできなかった。角に腰を下ろしていると、台所の上棚にトウモロコシの穂が覗いているのが目に入った。機会を見計らつてそれを奪取し、数粒剥ぎ取つて、もとのところに戻した。片手に握つたそれらの粒を炒るために、灰のなかに素早く入れ、燃えさしで覆つた。わたしはこの行為によって、ひどく殴られる危険を冒していた。というのも、ケイティおばさんはわたしを飢えさせるだけでなく、叩くこともあったからである。トウモロコシの粒は炒るのに長くはかからなかったが、仮にきつちり焼かれていないとしても、あまりの空腹でそれは問題ではなかった。待ちきれない気持ちで粒を灰から拾い上げ、自分の腰掛けの上に載せると、それは小さく整つた一山になった。このとても粗末な食事にありつこうとしたまさにその時、愛しき母が入ってきたのだ。そしてここで、親愛なる読者よ、実に見に値する一場面が繰り広げられたのであり、それはわたしにとって興味深いだけでなく、学ぶところの多いものであった。友人もなく、腹をすかせた少年が、極度の窮状にある時に——そしてあえて助けを求めようとはしなかった時に——気づくと、母親の強く、守ってくれる腕のなかにいたのだ。その瞬間

には、(実体的な力のみならず物腰の大いなる力に恵まれているがゆえに)彼の敵たちがすべて東になつても敵わない存在である母親の腕のなかにである。わたしが朝から食事をもらっていないということ、ケイティおばさんが「お前が死ぬまで飢えさせてやる」と言ったことを話した時の母のなんとも形容しがたい表情をわたしは決して忘れないであろう。彼女がわたしを見る目には憐れみがあると同時に、ケイティおばさんへの激しい怒りがあつた。そして、わたしからトウモロコシを取り上げ、そのかわりに大きなショウガ入りパンをくれて、同時にケイティおばさんに対して、彼女が絶対に忘れることのない説教を行つた。母はわたしのためにご主人さまに苦情を言つてやると彼女を脅したのだ。というのも、ご主人さまは、彼自身時として厳格で残酷ではあるが、ケイティおばさんが台所で行つて意地悪、不正、えこひいき、虐待は容赦していなかったからである。その晩、わたしは自分が子供というだけでなく、誰かの、子供であるという事実を知つた。母がわたしにくれる「甘いパン」はハートの形をしていて、縁に濃厚な黒っぽい衣が輪っか状にかかつていた。さしあたり、わたしは勝ち誇り、満ち足りていた。母の膝の上で、王座についた王よりも得意になつていた。しかし勝利は短かつた。わたしが眠りに落ち、朝に目をさますと、母はいなくなつており、ご主人さまの台所の支配者で、その燃えさかる怒りでわたしを常に怖気付かせていた褐色の口やかまし女の思うがままであることを知つたのである。

この出来事のと母に会つたという記憶はない。すぐに死がわたしたちの間に存続していたわずかな交流を終わらせたのだ。そ

れと同時に——彼女の疲れ切った悲しげな伏し目がちの面持ちと物静かな物腰から判断すれば——心からの悲しみに満ちた命も終わったのだと思う。母が病気であった長い期間のうち、わたしが母を訪問することを許されたことは一時たりもなく、母が病にかかって亡くなるまでの長い期間、母に会うこともなかった。死の床にあつてさえ、奴隷制の無慈悲で恐ろしい姿が母とわたしの間に立ちはだかつた。死ぬ間際でも、母親が自分の子供たちを呼び集めて、子供たちに神聖な訓戒を与え、子供たちのために臨終の祈りを捧げることは許されていない。女奴隷は奴隷として生き、野獸として死ぬようにされており、お気に入りの馬ほどの関心も払われないこともしばしばである。決して忘れ去られることなく、しばしば悪人の歩みを止めさせ、存命中の良きことを確認する、死の床を囲んでの神聖な親愛の場面は、時として奴隷たちの間にも見られるとはいえ、自由人の間に探し求められなくてはならない。自分の母親のことをほとんど知らず、母からこれほど早くに引き離されてしまったことは、わたしにとって長年の変わることはない悲嘆であつた。母の愛の助言があれば、それはわたしにとって有益であつたに違いない。母の横顔はわたしの記憶に焼きつけられており、人生の歩みを少しでも進めるたびに彼女の存在を感じるとはいえ、その横顔の像は物言わず、心の宝として印象に残っている母の言葉はない。

母の死の後、母が文字を読めたこと、そしてタッカホーの奴隷や黒人すべてのなかで、母がこの強みを享受する唯一の人物であつたことを知つた。母がこの知識をどのように身につけたのかはわからなかつた。というのも、タッカホーは世界のどこよりも

彼女が教育の便宜を得られそうもない場所だからである。したがって、母には真摯な知識欲があつたと、わたしが愛おしく誇らしい気持ちで考えるのも許されよう。どの奴隷州であろうと「野良働き」が文字の読みを学ぶというのは注目に値するが、場所を考えれば、母の偉業はかなり規格外であつた。そして、この事実を照らし合わせて、わたしがもっている文字への欲求、そしてそれをもっているということでもわたしが——数々の偏見にもかかわらず——非常な賛辞を受けてきた文字への欲求を、アングロサクソン系だと認められている父方ではなく、無防備で教養のない褐色の母親——現在の時流ではその知的能力が誇られ軽蔑されている人種に属する女性——の生来の才能に帰すことに少しも躊躇しないし、そのようにすることに喜びさえ感じる。

母が病氣だつた期間はずっと奴隷制の跳び越えられない深淵がわたしたちの間に横たわつていて、母は天からの召喚を受けると、誰がわたしの父親なのかについてひとつもヒントを残すことなく亡くなつてしまつた。わたしの主人がわたしの父親だという噂はあつたが、それは噂にすぎず、わたしが少しでもそれを信じていたなどとは言えない。実際、主人が父親ではなかつたと考えられる理由が今ではある。とはいえ、奴隷法によれば、子供はどんな場合でもその母親の身分とされるという事実が、その忌まわしさを煌々と放ちながら存続している。この取り決めののおかげで、残忍な奴隷所有者たち、そして彼らの放蕩な息子たち、兄弟たち、親戚たち、友人たちは最大限に好き勝手することが許されており、罪深い快樂は利益の魅力を伴うものとなる。わたしがこれらで実際に見てきたような奴隷制のこの特徴一点に関してだけでも

一冊の本を書くことができるかもしれない。

そのような血縁関係をもった子供は、その主人の管理下に置かれれば他の奴隷たちよりよい扱いを受けるだろうと思われるかもしれない。実際は完全に逆であり、ほんの少し考えてみれば、読者もそのことを納得するであろう。自分の血縁者を奴隷にするような人物に寛大さを期待して差し支えないとはならないであろう。ひとは自分の罪を思い出させるような存在を愛さない——そのひとが悔い改める気持ちをもっていなければ——ものであり、混血の子供の顔は、その子の主人であり父である彼にとってたゆまぬ非難となる。さらに悪いことに、ひよつとすると、そのような子供は主人の妻にとつて常に目障りであるかもしれない。彼女は子供の存在そのものを憎み、奴隷所有者の女性が憎む時には、その憎しみに顕著な効果を与える手段にこと欠かない。女性は——白人女性という意味だが——南部では崇拜対象であり、妻ではない。というのも、女奴隷のほうが多くの場面でもより好まれるからである。そしてこうした崇拜されるべき存在が領いたり指を立てて合図しさえすれば、哀れな犠牲者に災いあらん。続いて蹴りや殴打や笞打ちがくること必至である。しばしば主人は彼の白人妻の感情を尊重して、彼が所有するこの種の奴隷を売らざるをえない。自分自身の血縁者を奴隷商人に売るといのはおぞましく恥すべきことのように思えるかもしれないが、このように容赦ない迫害者のもとから離れさせてあげることが、子供奴隷への慈悲に基づいた行為であることもしばしばである。

わたしが奴隷として経験していない奴隷制のすべての側面についてあれこれ言うことは、わたしの簡素な物語の企図の範疇外で

ある。

しかし言わせてもらえば、もし聖書にしたがって、ハムの直系の子孫たちだけが奴隷とされるのであれば<sup>4</sup>、この国の奴隷制はすぐさま聖書に反する制度となるであろう。というのも、毎年——わたしと同じように——その生を白人の父親に、しかもかなりの頻度で自分の主人や主人の息子に負っている数千人の者たちがこの世に生まれているからである。女奴隷は主人の父親や息子や兄弟の思うがままである。考え深い人であれば、残りは察知しよう。

母の境遇とわたしと母との関係についてこれまで述べてきたことのあとでは、単なる真実にすぎないことを述べても、読者は驚かないであろうし、わたしを非難しようとも思わないであろう。すなわち、母の死の知らせを受け取った時、母への強い哀悼の気持ちも、母を失ったことに対する自分自身への後悔の念もほとんど感じなかったということである。わたしは母の価値を、彼女の死からずいぶん後に、他の母親たちの我が子への献身を目にする<sup>5</sup>ことで学ばなくてはならなかった。

この世の中で奴隷制ほどに、親子の愛情に対して破滅的な影響を及ぼす敵<sup>かた</sup>はいない。奴隷制はわたしの兄弟姉妹を、わたしにとつて見知らぬ人にしてしまい、わたしを産んでくれた母親を神話に変え、父親を神秘に包み、わたしが世界のなかでどこに出自をもつのかをわからなくしてしまった。

4 創世記9:25での、ノアがその末息子ハムに裸を見られたことに憤慨しハムの息子カナンに対して「カナンは呪われよ、奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ」と言って呪ったという記述に基づく。後世の解釈で、ハムはアフリカ系の人々の祖先だとされ、奴隷制を正当化する根拠となった。

母はわたしがせいぜい八歳か九歳の頃に、ヒルズボロの近隣にあるタツカホーのご主人さまの農園のひとつで亡くなった。彼女の墓は、洋上で死んだ人たちの墓と同じように、目印はつけられず、墓石も木板もない。

#### 第四章 奴隷農場の概観

ロイド農園の隔絶―ここでは評判が奴隷を守ってくれない―監督の絶対権力―この場所の自然的人工的魅力―その実務然とした外観―墓所についての迷信―ロイド大佐についての誇大な考え―奴隷間のエチケツト―喜劇的な奴隷医者―祈りと笞打ち―「ご主人さま」その恐ろしさを失う―彼の仕事―「ケイティおはさん」の性格―飢えに苦しむ―ご主人さまの家―農園の混成語―ギニア出身の奴隷たち―ダニエルさま―ロイド大佐の家族―アンソニー船長の家族―彼の社会的身分―身分と地位という考え

一般的な考えでは、メリーランド州では奴隷制はその最も温厚な形態をとって存在していて、アメリカ連邦の南部や西部諸州の奴隷制度を特徴づけているあの過酷で恐ろしい特性からは完全に無縁だと思われている。この見解を支える論拠として、自由州に近接している点と、メリーランドでは奴隷制が自由州の道徳的、宗教的、人道的感情にさらされているという点が言われている。

5 Preston, Young Frederick Douglassによれば、ハリエット・ベイリーが亡くなったのは一八二五年末か一八二六年始めなので(64)、ダグラスが七歳から八歳にかけての頃である。

わたしは、この議論を、当州全般に関するかぎりでは否定するつもりはない。それどころか、この議論はそうした一般的な程度まで十分に根拠があると喜んで認めよう。確かに、評判はそれが主人や監督や奴隷使役人に届く時や場所では、彼らの残忍さと非道さを確実に抑制するのだが、メリーランド州でさえ、健全な世論の光線が一本だろろうとめったに届かない隔絶した僻地―奴隷制がそれ自身と同質の深夜の闇に包まれていて、その悪意あるおぞましい特徴のすべてを發展させることができ、現に發展させている僻地がいくつもある。ここでは、奴隷制は恥じることなくみだらであり、おののくことなく残忍であり、暴露を心配することも恐れることもなく凶悪である。

メリーランドの東岸にあるエドワード・ロイド大佐の「本拠農園」<sup>ホームプランテーション</sup>は、まさにそのような隔絶した暗い僻地である。それはどの大街道からも離れており、どの町や村にも近くない。学校に通うべき子供もいないので、校舎は不要である。ロイド大佐の子供と孫は屋敷で家庭教師―ペイジ氏なるこの背の高いやせた若者は、奴隷には一年で十数語も話しかけることはなかった―から教育を受けていた。監督の子供たちはどこかの場所にある学校に通学していたため、この土地の奴隷制度の自然な働きを乱すような外来の異質なあるいは危険な影響を持ち込むことはない。この農園では職人―彼らをつうじて、他の農園の極悪非道への真剣で力強い怒りの噴出が時々起こるが―でさえ白人ではない。農園の全人口は三つの階級から構成、分割されている―**奴隷所有者、奴隷、そして監督**である。農園の鍛冶工、靴工、織工、樽工は奴隷である。商業は利己的で無情であり、弱者に対し

て強者の——貧しい者に対して富める者の——味方をするが、そうした商業でさえ、この隔離された敷地内では信頼されておらず、認められてもない。その秘密が漏れないようにするためなのはわからないが、この農園とロイド大佐の所有している近隣の農場のあらゆる農作物はロイド大佐自身の船でボルチモアへと運ばれるというのが事実である。しかも、この船に乗る者はすべて——船長を除けば——彼の所有である。その見返りに農園にもたらされるあらゆるものは、同じ経路によって農園にやってくる。こうして、時として文明化の影響をもたらすこともある商取引の輝かしく揺れ動く光明でさえ、この「禁忌の」場所からは排除されている。

ロイド大佐の「本拠農園」の近隣にあるほぼすべての農園や農場は彼のものであり、彼のものでない農園や農場も、奴隷制度をそのあらゆる過酷さのままに維持することにロイド大佐自身と同じくらい深く関心をもっている彼の個人的な友人たちが所有している。彼の隣人のなかには、彼に輪をかけて厳しいと言われている者もいる。スキナー家、ピーカー家、ティルマン家、ロッカーマン家、ギブソン家は同舟であり、<sup>6</sup> 奴隷所有している近所同士として、その鉄の支配においてお互いを強めていたのかもしれない。彼らは親密な間柄にあり、その利害と趣味は同一である。

読者も察知されるように、このような地域では、評判は奴隷を残忍な行為から守るうえであまり能率的でない。それどころか評

6 スキナー家、バカ (Bac) 家、ティルマン家、ロッカーマン家、ギブソン (Gibson) 家は、いずれも実在した近隣の奴隷所有者たち。

判は、彼に対する虐待を増加させ、激化させずにおかない。公の評判は公の慣習と大きく異なることがめつたにない。残忍さや不正に対する抑制となるためには、評判は人道的で高潔な共同体から生じるものでなければならぬ。ロイド大佐の農園は、そのような人道的で高潔な共同体からの影響にさらされていない。この農園はそれ自体として、それ自身の言語と規則と規定と慣習をもつ小国家である。国の法や制度は明らかにどこにおいてもこの小国家に関わりをもっていない。ここで生じる面倒事は、国の市民権力によっては解決されない。監督はたいがい告発人であり、判事であり、陪審員であり、弁護士であり、死刑執行人である。罪人は常にも申すことができない。監督が事件のあらゆる側面を処理する。

財産権をめぐる争いはない。というのも、すべての人は一人の人物によって所有されており、かれら自身は財産を所有しないからである。宗教と政治はどちらも排除されている。全人口のうち一方の階層はあまりに高位なため、説教師の手が届かず、もう一つの階層はあまりに低位なため、説教師が関心を払うことがない。この近隣では、貧者はその費用を払うことができる場合のみ、神の教えを説いてもらえる。奴隷は金をもたないので、神の教えには無縁である。政治家たちはこの地の人々には投票権がないので近寄らないし、説教師たちは人々に金がないので近寄らない。裕福な農園主は応接間で政治を学ぶことができ、宗教がなくとも一向に構わない。

ロイド大佐の農園は、その隔絶、孤絶、独立独行の自立性において、ヨーロッパ中世の男爵領のかつての有り様に似ている。陰

鬱で、冷たく、外部の共同体からの温和な影響をすべて退けて、それはそこに現前している。人間性と道徳に関するすべての点において、それはまるまる三百年分時代から遅れている。

しかし、この場所が呈する様子はこれだけではない。文明は排除されたが、自然は排除できない。世界の残りから隔絶されていて、すでに述べたように、評判はこの暗い領土に入り込む機会がめったになく、場所全体がそれ自体の独特な鉄のごとき個別性で刻印されていて、横暴で残忍な犯罪をここでは海賊船の甲板の上と同様に、ほとんど何のお咎めなしに犯すことができるとはいえない——にもかかわらず、ここは全体としては、外観からすると、生命と活動と活気に満ちた非常に際立つて興味深い場所であり、タッカホーの怠惰な単調さと倦怠感とは対照的に非常に好ましい印象を与える。タッカホーを離れたことに対してのわたしの落胆は痛切で、悲しみも大きかったとはいえず、わたしがこの新たなマイホームに適應するのに長くはかからなかった。苦難は、人が忍耐を彼の唯一の治療法とするとき、常に半分は消え去っている。わたしは気づくとここにいたのであり、逃げ出すことはできないのならば、せいっぱい善処する以外に何が残されていたらうか？ここには一緒に遊べる子供たちがたくさんおり、わたしの年頃の少年たちや年長の少年たちにとって心地よい遊び場がたくさんあった。祖母の小屋の愛しき対象からあれほど乱暴に欺瞞に満ちたやり方で引き離された愛情の小さな巻きつるは、しだいにつるを広げ始め、今やわたしを取り囲むことになった新たな対象のまわりに巻きつき始めたのである。

ご主人さまの家から一マイルか少し離れたところ、ロング・ポ

イント——マイルズ河をワイ河から分かつ土地——に風車（子供には常に圧倒的な存在）があった。「長つばら」と呼ばれる二十エーカーかそこらの開けた平坦な空間の低まったところに、泳げる川があった——それは子供たちにとってとても素晴らしい遊び場であった。

川の中、岸からほど近いところには、船尾に小型ボートを従えた大きなスループ型帆船が静かに停泊していた——サリー・ロイド号である。そのように呼ばれるのは大佐の愛娘にちなんでいた。このスループ船と風車は、思索と観念に満ちた驚くべき物体であった。子供はそのような物体をじっと見れば、考えないではいられないものである。

それから、とてもたくさんさんの家、生活のあらゆる段階の謎で満ちた人間の住居があった。道の先には、監督であるセヴィア氏が住んでいる小さな赤い家があった。ご主人さまの家にもう少し近づくと、とても長い粗作りの低い建物が建っており、そこはありとあらゆる年齢と状態と大きさの奴隷たちで文字通り溢れかえっていた。この建物は「長屋」と呼ばれていた。長つばらを横切つて、丘の上にあるのは、とても高いぼろぼろの古い煉瓦造りの建物——その建築物としての大きさは、それが別の目的で建てられたことを示していた——で、そこも今では長屋と同様に、奴隷たちが住んでいた。これら以外にも、他の数多くの奴隷家屋や小屋が近隣に散らばっていたが、それらはどれも隅から隅まで住人で溢れかえっていた。ご主人さまの家は長細い煉瓦造りで質素だがしっかりした建物で、農園の生活の中心に建っており、ロイド大佐の敷地内にあつて独立した住まいとなっていた。

これらの建物のほかに、納屋、馬小屋、倉庫、タバコ庫、鍛冶工場、車工場、樽工場があった——それらはいずれも興味深いものであるが、なによりも、わたしがそれまで見たなかで最も立派な建物、農園の皆が「大屋敷」と呼んでいる建物が建っていた。この建物にはロイド大佐とその家族が住んでいた。そこに住んでいたのはかれらだが、それはわたしに楽しみを与えてくれた。大屋敷は数多くのさまざまな形状の付随する建物に囲まれていた。さまざまな大きさと意匠の、すべてきれいに塗装された台所、洗濯場、搾乳場、あずまや、温室、鶏小屋、七面鳥小屋、鳩小屋、園亭があったが、それらの建物群に完全に入り混じって、裝飾的かつ原始的な立派な古木が間々に生えており、夏には気持ちのよい木陰を提供し、風景に高度に荘厳な美しさを分け与えてくれるのであった。大屋敷それ自体は大きな白い木造の建物で、三方向に延びた形状をしていた。前面には、長い柱列によって支えられた、建物の全幅にわたる大きな前廊があり、住居全体に荘重な威容の佇まいを与えていた。こうした富と権力と虚栄の手の込んだ誇示を見ることは、わたしの若く次第に開花しつつあった精神にとつての糧となった。屋敷への馬車用の入り口は屋敷から四半マイル以上離れた大きな門で、その間の空間は非常に念入りに手入れされ、最大限の注意が払われている美しい芝生であった。そこには気持ちのよい木立や灌木や花々が密に点在していた。門から屋敷までの道あるいは小道は、浜から運ばれた白い小石でたつぷりと舗装されており、その軌道は美しい芝生を取り囲む完全な円を形作っていた。大屋敷に入ったり退いたりする馬車は芝生を周回し、乗客はほとんどエデンの園のごとき美しい場面を見ること

が許された。このえり抜きの囲い地の外には大庭園があり、そこでは——イギリス貴族の邸宅の場合と同じように——ウサギ、シカ、その他の野生の獣が、手出しをする者も怖がらせる者もないため、顔をのぞかせたり遊びまわるのが見られるかもしれない。立派なポプラの木々のてっぺんはしばしばハゴロモガラスによって埋め尽くされ、その野性のさえずりの喜ばしい生命力と美しきで全自然が響き渡った。これらすべてがエドワード・ロイド大佐のみならず、わたしのものであり、わたしはしばしそれらを楽しんだのである。

大屋敷から少し離れたところには死者のための立派な霊廟があったが、それは陰鬱な相貌をもった場所であった。シダレヤナギとモミの木に覆われた巨大な墓はかつてのロイド家とその富を物語っていた。この家族の墓所については奴隸たちのあいだで迷信がはびこっていた。年配の奴隸たちのなかには、そこで奇妙な現象を見た者もいた。埋葬衣をまとい大きな黒い馬に乗った幽霊がそのなかに入っていくのが目撃されていた。深夜にそこで火の玉が飛んでいるのが目撃され、恐ろしい音が何度も聞かれていた。奴隸たちは、奴隸所有者として死んだ者は地獄に行くと思える程度には神学の基本を知っており、そうした人物たちが管を振るうためにもう一度戻って来たがっているとしたら空想する。この巨大な黒い墓に関連した奇妙で恐ろしい光景や音の話は、これらの周りにあるこの場所を実にうまいこと守ってくれるものとなった。というのも、奴隸たちのなかに昼間でさえここに近づこうと思う者はほとんどいなかったからである。それは暗く陰鬱で人を寄せ付けない場所であり、そこに安置されて眠る塵の霊

が、永遠の平和の世界で祝福された者たちと一緒に恩恵に浴していると感じることは困難であった。

二十か三十の農場の仕事が、その最重要性ゆえに「大屋敷農場」と呼ばれていることで処理されていた。これらの農場はすべて、そこにいる奴隷たち同様に、ロイド大佐の所有であった。それぞれの農場はひとりの監督の管理下にあった。本拠農場の監督についてわたしが述べたのと同じことが、より小規模の農場の監督についても言えるだろう。つまり、監督は奴隷とすべての市民制度のあいだに割って入る——監督の言葉は法であり、暗黙のうちに従われる。

この当時、大佐はとても裕福だという評判であり、見たところその通りであった。彼が所有している奴隷だけでも莫大な資産であった。大人も子供も含めたそれらの奴隷は数にして一千を下ることはありえず、ジョージアの商人に一団かそれ以上の奴隷を売り払うことなく一ヶ月が過ぎることはめったになかったにもかかわらず、大佐の奴隷在庫の数が目に見えて減少することはなかった。本拠農場は年若き子たち、すなわち人間という収穫物の移送に悲嘆の声を上げるだけで、そのあとはいつともどおりの快活さで仕事が続くのであった。近隣のすべての農場のための馬蹄作り、荷車修繕、鋤の修復、樽作り、製粉、織物はここでなされており、こうした部門すべてで奴隷が使われていた。「トニーおじ」は鍛冶屋、「ハリーおじ」は車大工、「エイベルおじ」は靴職人であり、彼らはいずれもそれぞれの専門分野で彼らを手伝ってくれる人手を抱えていた。

こうした職人たちは若い奴隷たちみながら「おじさん」と呼ば

れていたが、それは彼らがそうした親戚関係にあったからではなく、農場の礼儀作法に従って、若者から年配の奴隷に当然払われるべき尊敬のしるしとしてであった。これほどまでに素朴な人々のあいだで、しかも直視すべき数多くの厳しい試練があるなかで、奇妙あるいはばかげているように思えるかもしれないが、年長者への敬意という法をかれら以上厳格に堅持している人々は見当たらない。わたしはこれを部分的にはわが人種の生まれつきの性質に帰し、部分的には慣習に帰している。紳士を作り出すのに、アフリカ人によって提供される素材以上により素材はこの世にない。アフリカ人はその主人に対して表明するよう強いられているあらゆる尊敬のしるしを他の人たちに示し、自分自身に対しても求める。若い奴隷は恭しい態度で年長者の集団に近づかなければならず、もしなんらかの好意に対して、通例の「ありがとございます」などで感謝を示すことをしなかつたら、災いあらん。奴隷たちのあいだでは丁寧な振る舞いはあまりに一般的なので、わたしは「偽物の」逃亡奴隷をその振る舞いによって簡単に見抜くことができる。

農場の著名な奴隷たちのなかに、皆によってアイザック・コッパーおじさんと呼ばれている者がいた。メリーランドでは奴隷がだれかから姓を得ることはまれで、この点では南部が北部の風習を完全に方向づけてきたので、奴隷制廃止論者たちでさえ黒人の姓をかなり軽視している。南部での「ビル」、「ジャック」、「ジム」、「ネッド」といった呼び名に対してこの地で見られる唯一の改善と云ったら、「ウイリアム」、「ジョン」、「ジェームズ」、「エドワード」が代わりに使われるくらいである。白人に対するのと

まったく同じやり方で黒人を扱い、黒人に呼びかけることは慣習に反している。しかし時として、自由州においてだけでなく奴隷制においても、なんらかの尋常ならざる事情によって黒人が姓を付けられ、あらゆる慣習にもかかわらずそれを保持することがある。アイザック・コッパーおじさんがまさにこれにあたる。「おじさん」が省略されるときには、その代わりに「医師<sup>ドクター</sup>」という敬称がたいい使われた。彼はわたしたちの医学博士であり、神学博士でもあった。彼がどこで学位を得たのかは言うことができない。というのも、彼は目下の者に対してはあまり言葉数が多くなく、七歳か八歳に過ぎないわたしはまさにそのような存在だったからである。彼はその職業であまりに確固とした地位を築き上げていたので、彼の生まれつきの能力や学識について質問することは許されなかった。彼がひとつの資格をもっていることは疑いかなかった——彼は不治の障害者であり、働くことはできず、もし市場で売りに出されてもいくらにもならなかったであろう。この老人は足が不自由とはいえ、怠け者ではなかった。彼は松葉杖をうまい具合に使う人物であった。彼はいつでも注意を怠らせずに、病人そして彼の助言を必要とすると思われるような人物であればだれでも捜し求めている。彼は処方する治療法として四つものを使っていた。身体の病気にはエプソム塩とひまし油、魂の病気には主の祈りとヒッコリー材のむちである！

ロイド大佐のところに来てまもなく、わたしはアイザック・コッパー医師の監督下に置かれた。「主の祈り」<sup>7</sup>を学ぶために二

十人か三十人の他の子供たちと一緒に彼ののもとに送り込まれたのである。老紳士は何本かの大きなヒッコリー材のむちで武装して三つ足の巨大な腰掛けに座っており、彼のいるところからは部屋の中の少年にも——足が不自由にもかかわらず——手が届くようになつていた。老紳士は、わたしたちがどの程度のことをできるのかを確かめるためにしばし立ち上がったのち、敬虔とはとても言いがたい口調で、わたしたちに跪くよう命令した。これが終わると、彼が言うことすべてを言うようにと命じ始めた。「われらが父なる神よ」——わたしたちはこれを彼に続いてすぐさま声を揃えて繰り返した。「天におられる父よ」——は先ほどより遅れて、やや揃わずに繰り返した。すると、老紳士は祈りを一時中断し、不注意がもたらす直近と未来の帰結、特により直近の帰結について短い説教を垂れた。彼はこの直近の帰結について絶対的な確信をもっていた。というのも、彼はその右手に自分の予言と警告のすべてを実現する手段を握っていたからである。彼は祈りを続け、わたしたちは鈍重な舌と未熟な耳ながらも全力で彼にならった。しかし、これは老紳士を喜ばすには十分ではなかった。南部ではだれもがだれか別の人を笞打つ特権を欲しがっている。アイザックおじは彼の故郷に広く行き渡った情熱を共有しており、したがって、規律を保つためにどんな手段を用いるにせよ、笞打ちには及ばないと思うことはめったになかった。「わたしは言うことすべてを言いなさい」、すると、だれか哀れな少年の敬虔さを欠いた頭に笞がバチンと飛んでくるのであった。「何を見ているんだ」——「押すのはやめなさい」——そしてまたもや笞が振り下ろされるのであった。

答は全能であった。それは奴隷所有者への服従を保証すると考  
えられ、奴隷たち自身のあいだでも、現世的だろうと精神的だろ  
うと、あらゆる種類の反抗に対する絶対的な治療法だとみなされ  
ていた。奴隷所有者のみならず奴隷も、それを惜しむことなく  
使っていた。アイザックおじのもとでのわたしたちの勤行は、悲  
劇と喜劇の要素をあまりに多く持ち合わせていたので、精神的な  
観点からはあまり有益ではなかった。そして真実を尊重するなら  
ば、アイザック・コッパ―医師の祈りと答打ちに参加する時間が  
くると、わたしはしばしば休むしてしまったことを告白しな  
くてはならない。

年配の心優しいイギリス人キニー氏が管理している風車は、わ  
たしにとって尽きることない関心と喜びの源泉であった。この老  
人は、肌の黒いわんぱく小僧たちの一団が、麻くず地のシャツを  
風にはためかせて、彼の驚くべき機械を眺め感心するためにやっ  
てくるのを見ると、いつも嬉しそうな様子だった。風車からは、  
ほかにとても興味深いものが見えた。それはセント・マイケル  
ズからボルチモアに向かう船々であった。小さな船たちが走り過  
ぎる際に、はたたく帆と入り組んだ索具を眺めて、ボルチモアが  
どんな場所なのかについて考えを巡らすことがたいへんな楽しみ  
の源泉であった。わたしのまわりにこれほどたくさん興味味の源  
泉があったことから、読者は、わたしがロイド大佐の農園をとて  
も素晴らしい場所だと思いはじめたと聞いても意外には思わないで  
あろう。それはまさにわたしの少年らしい趣味にあった場所であ  
った。川には針と糸さえあれば釣ることのできる魚がいた。蟹  
や貝や牡蠣は、水の中を歩いて泥を掻いたり掘ったりすれば獲る

ことができた。ここには実に魅力的な勤勉と進取の領野があつた  
のであり、読者はわたしが意気込んでそこに飛び込んでいったと  
思ってもらっても構わない。

その無慈悲な命令によってわたしをタッカホーから連れ出した  
あの恐ろしいなご主人さまでさえ、わたしの心にはその恐ろしさ  
がだんだんと失われていった。奇妙なことに、このお方はわたし  
に對しても、わたしが来たことに對しても特に関心を払っていな  
いようであった。飛び出してきてわたしを平らげてしまうどころ  
か、彼はわたしの存在をほとんど意識していないようであった。  
実のところ、彼はわたしの面倒をみたり嫌がらせをしたりするよ  
りも重大で大切な事柄で手一杯だったのである。おそらく彼は、  
わたしの到来を、自分の在庫に一頭の豚が加わるのと同じ程度に  
しか気にかけていなかったのだ！

ロイド大佐の農園の使用人頭としての彼の仕事は数多く、や  
こしかつた。ほぼすべての重要な事柄に関して、彼はロイド大佐  
の代わりを務めていた。すべての農場の監督たちはある意味で彼  
の下に置かれていて、規則を受け取るのも彼の口からであった。  
大佐自身はめつたに監督に話しかけることも、監督に話しかけら  
れるのを許すこともなかった。ご主人さまはすべての倉庫の鍵を  
持ち歩いており、それぞれの奴隷に毎月末の配給を配分し、農園  
に搬入されるすべての物資の仕入れを管理し、すべての職人に原  
材料を支給し、穀物、タバコ、そして農園のすべての売買可能な  
生産物を市場に出荷し、樽工場、車工場、鍛冶工場、靴工場を全  
般的に監督していた。こうしたことの管理に加えて、農場関連の  
仕事で、彼はしばしば二、三日不在にしていた。

このように手広く仕事に携わっていたので、彼は子供たちと個々に関わる時間はほとんどなかったし、おそらくそうするつもりもほとんどなかったであろう。彼は、自分がロイド大佐に対してやっていることを、ケイティおばさんが彼に対してやるようにさせていた。わたしたちについてなにか言うべきことややるべきことがある時には、すべてをひとくくりにして言ったりやったりした。つまり、集団や体の大ききごとにわたしたちの処遇を決めて、詳細についてはすべてケイティおばさん——この人に対しては、読者はすでにあまりよろしくない印象を持たれているが——に任せてしまうのである。ケイティおばさんは、彼女に与えられた権限がどんなに広範であれ、その枠内に大いに収まって行動することをよしとしない女性であった。野心的で気難しく残忍な彼女は、この職務に、彼女の不吉な性質を行使するのに十分な場を見出したのである。彼女は「ご主人さまをしつかり掌握していた——彼女は一流の料理人だと考えられており、実に勤勉であることに間違いなかった。したがって、彼女はご主人さまに非常に好かれており、彼の好意の印として、自分の身辺に自分の子供をとどめておくことを許された唯一の母親であった。それら自分の子供に対してさえ、彼女はその残忍さにおいてしばしば苛烈であった。ある日、彼女はわたしの眼の前で、巨大な屠殺包丁をもって自分の息子フィルを追いかけ回し、その刃で一撃を与えたため、彼の腕の手首近くには見るに堪えない傷が残った。このため、ご主人さまは彼女をひどく叱りつけ、このようなことをまたやったら背中が剥けるほど笞打ちを食らわせてやると脅したのだった。しかし、ケイティおばさんは自分の子供たちに対して

非情だったとはいえ、しばしばわたしにも知る機会があったように、わたしが耐え忍ばなくてはならなかった飢えの苦しみの際には、時として母親らしい感情がないわけでもなかった。ロイド大佐のやり方とは違って、ご主人さまは、それぞれの奴隷にこれだけの分を配給するということはせず、全員分の配給をケイティおばさんの管理に委ねて、調理後にわたしたちのあいだで分け与えさせるようにした。配給されるのは粗末なトウモロコシ粉であったが、あまり十分ではなかった——実のところ、とてもわずかであり、ケイティおばさんの手を通過すると、わたしたちのなかには、さらに少ししかもらえない者もいた。ウィリアムとフィルとジェリーが彼女の子供であり、彼女は自分の子供たちには文字通り詰め込むように食べさせていたのに対し、わたしやほかの子供たちをしばしば飢えさせていたと申し立てることは、彼女をあまりに厳しく批難することにはあたらない。食糧不足がご主人さまのところに来て最初の夏のわたしの主な苦勞であった。牡蠣や貝は時々パンの供給があれば十分に用をなすのだが、パンがないとすぐに立ち行かなくなってしまうのだった。しばしば飢えがあまりにも苦しかったので、台所のテーブルから落ちた小さなパンくずをめぐって犬——「老ネップ」——と争い、戦いのなかでパンくずひとつを勝ち取って歓喜したとわたしが言う時、わたしは単なる真実を述べているにすぎない。給仕の女の人がテーブルクロスを払いに外に出る際に、わたしは待ちきれない足取りで彼女の後を追って、猫のために投げ捨てられるパンくずと小骨を得ようとしたことが何度あったことか。肉の茹で汁も同じくらい食欲に求められた。この汁に一切れのパンを浸すという特権を得るのは

素晴らしいことであり、さび色がかったベーコンから剥がれ取れた薄皮は間違いない贅沢であった。にもかかわらず、時々、わたしの苦しみをわかってくれる思いやり深い年配の奴隷たちがいっぱいのお食事と優しい言葉をくれて、いつかお前も大人の男になると励ましてくれることもあった。「気にするな——よい日はくるさ」はその当時でさえ、苦境にあるわたしにとつては慰め、元気を与えてくれる慰安であった。また、優しい言葉をくれるのは奴隷たちだけというわけでもなかった。わたしにはお屋敷にもひとり友人がいて、物語のこの部分を終える前に、その人にきちんと触れておきたい。

ご主人さまのところに来てまもなく、主人の姓はアンソニーであること、彼は一般に「アンソニー船長」と呼ばれていることを知った——これはおそらくチェサピーク湾で船を走らせていることからついた名前であった。ロイド大佐の奴隷たちはアンソニー船長を「ご主人さま」とは呼ばず、常にアンソニー船長と呼び、わたしのことは「アンソニー船長・フェッド」と呼んでいた。おそらく南部じゅうを見渡しても、ロイド大佐の農園におけるほどおかしな英語が話されている農園はないであろう。それはギニアとほかのありとあらゆるものの混合である。この話の当時、アフリカの海岸から連れてこられた奴隷たちが農園にいた。彼らは所有格を表すのに「s」を使うことがなかった。「アントニーせん

8 当時の言葉でギニアとはアフリカ西海岸の現在のシエラレオネからベナンあたりまでの一帯を一般に指すが、ここではそこから転じて、特に南北戦争以前のアメリカ南部で奴隷たちによって話されていた英語とアフリカ系言語の要素を組み合わせた独特の方言を意味する。

ちょ・トム (Cap'n Antney Tom)」「ロイ・ビル (Lloyd Bill)」「ローズおばさん・ハリー (Aunt Rose Harry)」は「アンソニー船長のトム」「ロイドのビル」等々を意味する。「おめだれんもん? (Oo you dem lang to?)」は「お前は誰のもの? (Whom do you belong to?)」を意味し、「もんもあるけ? (Oo dem got any peachy?)」は「桃を持ってゐるか? (Have you got any peaches?)」を意味する。はじめ彼らと一緒になつたとき、彼らの言葉はあまりにめちゃくちゃだったので、わたしにはほとんど理解できなかった。地球上のどこに連れて行かれるにせよ、知識という点では、この農園ほどに、すぐ近くにゐる仲間たちから得られるものが少ない場所ではなかったと確信している。「ダニエルさま」でさえ、彼の父親の奴隷たちとの関わりをつうじて、受け入れるべき考えが奴隷たちになれば、無視できない程度に奴隷たちの方言と考えを受け入れていた。自然の平等が子供時代には強く顕現するのであり、子供時代は仲間として子供を必要とする。子供にとつて肌の色は重要でない。あなたは、すべての子供たちに共通の必要と趣味と営為を後付けではなく生まれついて身に付けている子供だろうか? それならば、黒檀のごとく肌が黒くても、雪花石膏の白さの子供から受け入れられるであろう。埋め合わせの法則がほかのところと同様にここでも当てはまる。ダニエルさまは無知からの影響を受けることなく無知と関わるべきでないし、彼の知性を分け与えることなしに彼の黒い遊び仲間たちと付き合うこともできな

9 ダニエル・ロイド(一八一—?)はエドワード・ロイド五世の末息子で当時十二歳くらい。その息子ヘンリー(一八五二—一九二〇)は一八八〇年代にメリーランド州知事となった。

かった。当時、わたしはそんなことは知らず、また気にしもせず  
に、なんらかの理由で、時間の大部分をほかの少年たちと一緒に  
過ごすよりも、好んでダニエルさまと一緒に過ごしていた。

ダニエルさまはロイド大佐の末息子であり、その兄にはエド  
ワード<sup>10</sup>とマレー<sup>11</sup>がいた——二人とも成人していて、格好のよ  
い男たちであった。特にエドワードは子供たち、とりわけわたし  
から慕われていた。といっても、彼が特に親切と言えるような何  
かをわたしたちに、あるいはわたしたちのために言ってくれたと  
いうわけではなかった。わたしたちを蔑んだ様子を見せたり、蔑  
んだ行動をしなかったということであつた。わたしたちにとつては十分  
だったのである。ほかに三人の姉妹がおり、みな結婚していた。  
ひとりにはエドワード・ワインダー<sup>12</sup>と、二人目はエドワード・ニ  
コルソン<sup>13</sup>と、そして三人目はラウンズ氏<sup>14</sup>とである。

ご主人さまの家族は二人の息子アンドリユー<sup>15</sup>とリチャード<sup>16</sup>、

10 エドワード・ロイド六世（一七九八〜一八六一年）。一八五一〜五二  
年にメリーランド州議会上院議員。

11 ジェームズ・マレー・ロイド（一八〇三〜一四七年）。

12 エドワード・ストートン・ワインダーは、一八一二〜一六六年にメリー  
ランド州知事を務めたレヴィン・ワインダーの息子。一八二〇年にロイ  
ド大佐の長女エリザベスと結婚した。

13 ダグラスはニコルソンのことをロイド大佐の義理の息子だとしてい  
るが、実際にはジョセフ（エドワードではない）・ニコルソンは、ロイド  
大佐の姉（もしくは妹）レベッカとその夫で連邦下院議員のジョセフ・  
ホッパー・ニコルソン（一七七〇〜一八一七年）の息子なので、ロイド大  
佐の甥にあたる。

14 チャールズ・ラウンズ（一七九八〜一八八五年）は一八二〇年代半ば  
にロイド大佐の娘サリーと結婚した。

15 アンドリユー・スキナー・アンソニー（一七九七〜一八三三年）。

16 リチャード・リー・アンソニー（一八〇〇〜一八二八年）。

娘ルクリーシア<sup>17</sup>、それから新婚の彼女の夫であるオールド船長  
からなつていた。彼らはお屋敷側の家族であつた。炊事場側の家  
族はケイティおばさんとエスターおばさん<sup>18</sup>、それからほとんど  
がわたしより年長の十数人ほどの子供たちからなつていた。アン  
ソニー船長は富裕な奴隷所有者とは考えられていなかったが、世  
間での羽振りはかなりよかつた。彼はタツカホーに三十「頭」ほ  
どの奴隷と三つの農場を所有していた。彼の財産のうち最も価値  
が高いのは奴隷たちであり、そのなかから毎年ひとりを売りはら  
う余裕があつた。したがって、この収穫物は、毎年の給与と農場  
からのほかの収入に加えて、一年に七百か八百ドルを彼にもたら  
していた。

身分と地位という考えは、ロイド大佐の農園では厳密に維持さ  
れていた。わたしたち家族が大屋敷を訪問することは絶対にな  
く、ロイド家の人々がわたしたちの家に来ることも絶対になかつ  
た。これと同等の干渉がアンソニー船長の家族と監督のセヴィ  
ア氏の家族のあいだで守られていた。

親切な読者よ、わたしが奴隷制と奴隷生活に関する最初の最も  
永続的な印象の数々を受け取った土地はこのようなもので、その  
場所はこのようなものであつた。これらの印象について、あなた  
はこの本の続く章でさらに知ることになるだろう。

17 ルクリーシア（一八〇四〜一七七年）は、一八二三年にロイド大佐の雇  
用人でアンソニー家の下宿人であつたトマス・オールドと結婚した。

18 ヘスター・ベイリーののこと。この人物については次章で詳しく述べ  
られる。